

つばめと魚

小川未明

青空文庫

そこは、町の^{まち}にぎやかな通り^{とお}でありました。ある店の^{みせ}前^{まえ}へ子^こどもがあつまっていました。ちようどきかけたつばめは、どんなおもしろいものがあるだろうと自分^{じぶん}もおりてみました。店^{みせ}には、金^き魚^{ぎよ}や、めだかなど、いろいろならべてあつたが、その中^{なか}でも、ガラスのいれものにはいった熱帯魚^{ねつたいぎよ}がめずらしいので、みんなは、この前^{まえ}に立^たつて、美^{うつく}しい姿^{すがた}に見^みとれていました。

「なあんだ、あの魚^{うお}たちなら、おれはよく知^しっているぞ。それにしても、よくこんな遠^{えん}方^{ほう}まで渡^{わた}つてきたもんだな。」と、つばめは、屋根^{やね}のあたりを飛^とびながら、いいました。

パイチク、パイチク、つばめがしきりとなくので、ガラスばち

の魚も、なんだかききおぼえのある声こえと思つたのでしよう。上うえを仰あおぐと、つばめは、

「人のひといないときに、またまいりますよ。」といつて、飛とび去さりました。それから、じきに、またつばめは、やってきました。

「やあ、お達たっしや者でけつこうなことです。どうして、こんなところへきましたか。でもりつばなうちにはいって、きれいな砂すなをしいてもらい、そのうえおいしそうな餌えがたべられておしあわせではありませんか。」と、つばめは、魚うおたちに、いいました。

「そうおつしやれば、まあしあわせですよ。なにしろ、みんなが私わたしたちを、金魚きんぎよよりきれいだといつて、ほめてくれますし、めずらしいので、貴重きちようひん品あつかいにして、価あたいも高たかくつけ、大だいじ事に

してくれまますから、くにに、いたとぎのことを考えれば、くらべものになりませんよ。」と、熱帯魚は、答えました。

「まったく、あちらにいては、あなたたちの、きれいなのが、めだちませんでしたものね。」

「いったい、くにの人は、ほんとうに美しいものを、見る目がな
いんですよ。」と、一匹の魚が、いきごんでいいました。

「そうばかりではありません。あちらの自然が、きれいなのです。
花でも、虫でも、日の光から、水の色まで、なにもかも、赤・緑
・青・黄というふうに目のいたくなるほど、色がこいのですから、
あなたたちがめだたぬのも無理はありません。」と、つばめはさ
としました。

「こんなに、のんきに、暮らされれば、くにへなど、かえりたくありません。」と、ほかの一匹がいました。

そのとき、青い顔色の少年が、疲れているらしく、重そうな歩きつきをして、あちらからきました。つばめは、それと同じ時に、飛び去りました。

少年は金魚をちよつと見ただけで、やはり、熱心に熱帯魚をながめていました。そして、心からそう思うもののごとく、

「いいな、こんな魚たちは、なんにも知らずに、のらり、くらりと、ただ食べて、泳いでいられて、おれたちは、病気で、仕事を一日休むのも、容易でないんだからな。」と、ひとりごとをい

いました。

たとえ、それが事実であつても、この世の中では、まだ少年に真に同情するものがなかつたのです。少年は、また重そうに病める足を引きずりながら、歩いていきました。

日が暮れると、このごろは毎晩のように、いい月が出ました。月は町の家々を照らして、戸のすきまからのぞきこみました。「こんな月を見ると、さすがに、くにを思いだすな。」と、熱帯魚の一匹が、いいました。

「あのジャングルを流れる、おれたちのすんでいた川をてらすだらうか。」と、ほかの一匹も、月をながめました。

「しかし、こういう月夜に、私たちは、よくあの怖ろしいへびに

ねらわれたものだ。それを考えると、二度と、あの川へ帰りた
と思わない。」

「そうだけれど、おれたちのきょうだい、あすこにいるだろう。
つばめさんが帰るとき、ことづてを頼もうじやないか。」と、魚
たちは、清らかに、月のさし込む、ガラスばちの中で話をしてい
ました。月ばかりは、昔から、今日まで、なにを見ても、悲しむ
こともなければ、また喜ぶこともなかったのです。さながら、つ
んぼで、おしの女のように、ただ、じつと、この世の中の有り様
をみつめているばかりでした。

ある日、つばめは、カンナの花や、さるすべりの花が、赤々
と咲いている、公園を飛んでいて、ふと魚たちのことを思い出

しました。

「そうだ、私は近いうちに、南の国へ旅だつが、あの魚たちは、その後ごどうしているだろうか。」

つばめはそう思うと、すぐ町の店へやってきました。すると、いつか熱帯魚ねったいぎよのはいつていたガラスのはちには、ふな、はや、たなごなどの、うす墨色ずみいろをした、川魚かわうおの子が、はいつていました。

「もしもし、いつかの魚たちはどうしましたか。」と、つばめは、川魚かわうおの子に、ききました。

「ああ、あのきれいな魚さんたちですか、この店みせのおかみさんが、主人しゅじんの留守るすに、水みずをかえるのを忘れて、みんな病びようき気きにしてし

まい、おかみさんは、たいそうしかられましたよ。」と、ふなが、おしえました。

「まあ、かわいそうに、そしてどうしましたか。」と、つばめは、友ともの身みの上うえをしんぱいしました。

「このおくの、別べつのいれ物ものへいれてあるようです。」

勇敢ゆうかんなつばめは、軒下のきしたをくぐって、店みせのおくまではいりま

した。はたして、魚うおたちはせとびきの容器ようきにはいつて、息苦いきぐるし

そうに、あふあふとあえいでいました。そして、つばめを見みても、

ものがいえぬようでした。つばめは、気きの毒どくに思おもったけれど、

どうしていいかわからぬので、いくたびも、出でたり、入はいったりす

るばかりでした。

「ああ、ほかから与えられた幸福は、はかないものである。やはり、私は、自分の力だけを頼りとしよう。」と、つばめは、これを見て深く感じたのでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「心の芽」文寿堂出版株式会社

1948（昭和23）年10月

初出：「初等四年」

1946（昭和21）年10月

※表題は底本では、「つばめと魚《うお》」となっています。

※初出時の表題は「燕と魚」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

つばめと魚

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>